

# 自己点検・評価表

平成20年度

新潟薬科大学応用生命科学部

## まえがき

昨年度は3名の外部評価委員の方々のご協力を得て応用生命科学部としての初めての外部評価を実施しました。平成20年度の「自己点検・評価表」の作成に当たっては、記載事項と内容の統一性（公平性）に欠けているという外部評価を受け止めて、項目毎の記載内容に関する具体的な指示や例示をすることによって統一性を改善するように努めました。まだ不十分な点が多く認められますので、今後さらに改良を加えていくことが必要です。また、平成20年度の自己点検・評価表では平成19年度の評価結果を考慮した記載をお願いしました。この点検・評価、学生による授業評価結果および平成20年度に作成した各種の資料をもとに第2回目の外部評価を実施する予定です。

教員個人および委員会の自己点検・評価が応用生命科学部の教育、研究、社会貢献に寄与する一助となることを願っています。

平成21年7月31日

応用生命科学部長

平 岡 昇

## 目次

### ●教育職員の自己点検・評価表

研究室	教授	頁	准教授	頁	助教	頁	助手	頁
動物・細胞生物工学	市川 進一	2			伊藤 美千代	43		
応用微生物・遺伝子工学	梨本 正之	3	高久 洋暉	24				
生物機能化学	石黒 正路	5	米田 照代	27	田宮 実	45		
植物資源学・細胞工学	平岡 昇	7			相井 城太郎	46		
環境安全科学	及川 紀久雄	*	川田 邦明	28				
生物分子科学	武内 征司	8	中村 豊	31			小島 勝	55
化学・生物学	波田野 義比古	10						
化学・生物学	太田 達夫	12						
食品機能科学・食品分析科学	小西 徹也	13	佐藤 貞治	34	西田 浩志	47		
食品・栄養科学			三宅 紀子	36	永塚 貴弘	49		
食品製造・食品工学			重松 亨	38	上野 茂昭	*		
食品微生物・食品安全学	浦上 弘	17			小長谷 幸史	51		
食品生物工学・分子科学	鰯坂 勝美	19	新井 祥生	40	宮崎 達雄	52		
機能性食品開発	平山 匠男	22					中野 理子	*
英語			高橋 歩	42				

\* 退職

### ●委員会

委員会	頁	委員会	頁
予算委員会	57	全学委員会	HP委員会
将来計画委員会	58		IT委員会
自己点検・評価委員会	59		安全衛生委員会
FD委員会	60		サイバーキヤンパス推進委員会
教務委員会	61		ハラスメント防止委員会
学生委員会	63		センター(全学) 産官学連携推進センター運営委員会
入試委員会	65		図書館運営委員会
入試委員会(広報関係)	66		放射線安全管理委員会
就職委員会	67		放射性同位元素利用施設運営委員会
図書委員会	68		動物実験委員会
国際交流委員会	69	施設・管理(全学)	組換えDNA実験安全委員会
共通機器・施設委員会	70		入試委員会
倫理審査委員会	71		教務委員会
病原体等安全管理委員会	72	研究科の委員会	博士後期課程設置委員会
防災委員会	73		

### ●資料

授業担当時間・委員会担当・研究業績	93
-------------------	----

# 自己点検・評価表

# 平成 20 年度 自己点検表（記入要領と記載例）

（記載事項がない項目は、項目名を残して空欄とする。記載事項が多い場合複数頁も可。）

職名		氏名		研究室等	
1 教育活動（業績） 年間総時間数： 時間（別添ファイルのM欄の数字） 学部授業：教科目名、学年、前後期の区別、コマ数を記載する。コマ数は、その数え方を統一するため、教務課で作成した一覧表「H20 担当授業時間数」の授業コマ数（F欄）を参照してその数字を記入する。 例：○○学（1年前期 14）、△△学（2年後期 14） 大学院授業：○学特論（前期 8）、○学特殊講義（後期 8）					
2 研究活動（業績） 形式は自由とし、本人の名前に下線をつける。 ①発表論文：査読のある学術誌掲載論文 ②学会発表： ③著書： ④特許出願： ⑤科研費： ⑥受託研究費： ⑦奨学研究費： ⑧その他の研究活動：その他の論文を含む。					
3 委員会等の活動 法人：評議員 大学・学部：部局長会、産官学連携推進センター、学生委員会（委員長）、教務委員会 大学院：入試委員会					
4 社会的活動 学会活動：所属学会を記載し、編集委員、役員などを担当している場合は役職名をカッコ内に記載する。日本化学会（編集委員）、日本生化学会（評議員）、日本薬学会 公的活動：国、地方公共団体、公的団体の役員、委員、審査員など。新潟市〇〇審議会委員 非常勤活動：他の教育機関の非常勤講師、学術的な講演・講義・講習の講師、児童生徒を対象とした講座（SPP、出前講義など）の講師、学術集会の実行委員など。					
5 教育、研究、大学の運営に対する提言と前年度評価に対するコメント					

# 委員会実績報告

# 学部委員会

委員会名	予算委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎平岡 昇、波田野 義比古 今年度から予算・財務委員会の名称を表記のとおり変更した。	
年間の活動：	
1) 平成20年度決算 100万円単位の黒字予算編成で出発した。決算では、入学定員以上の新入生を確保できたこと、寄付金と補助金の増額、教員人件費の抑制を引き続き実施したこと、各予算単位で支出削減努力したことなどの要因により5,000万円余の黒字となった。 2) 平成21年度予算 平成21年度の予算編成に当たっては、①人件費の抑制に努める、②研究室間の教員数のアンバランスを考慮して極端な研究費の差が出ないように研究費配分基準を改定する、③実習資材が一通り整備されたことに伴い実習予算を削減する、④大学院研究費の一部削減と博士課程の研究費の新設および項目の1本化を実施することを方針とした。	
問題点の提起： 学生数が大幅に少なかった平成18年度入学生が平成21年度末に卒業する。引き続き新入生の安定確保に努め、かつ人件費の大幅な増加を控えるならば、平成22年度から若干黒字幅の増加を見込める。これにより、学部開設後9年経過して更新、修理あるいは新規購入が必要な研究用機器類の維持、充実を図る、あるいは学部として新規のプロジェクトを立ち上げることができるような平成22年度予算編成をめざす。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。) 問題点の提起で述べたように予算編成を工夫し、教員の理解を得ることに努める。 機器については、両学部の機器委員会の統合も検討されていることも勘案し、薬学部と協調して進める。	

委員会名	将来計画委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎平岡 昇、武内 征司、波田野 義比古、太田 達夫、浦上 弘、鰯坂 勝美	
年間の活動：	
<p>委員会で作成した「応用生命科学部の編成について」の案を9月の教授会に提示し、10月にこの件で教員懇談会をもった。教育に関する議論の他に学部の方針や広報戦略の確立の必要性が議論された。続いて、これまでの教員による自己点検・評価、大学基準協会の大学評価および1月に初めて実施した外部評価を参考にして委員会で学部の現状分析を行って「将来計画」の概略案を作成し、三つの重点目標を掲げた。3月にこれに基づいて教員を3グループに分けて議論した結果、各委員会の課題が浮き彫りになるとともに重点目標に関しては大方の賛同が得られた。</p>	
問題点の提起：	
<p>高校生とその保護者、高校教師、企業、一般市民に分かりやすい応用生命科学部の方向性を示すことが重要である。それに基づいて教育体系の見直しをすること、研究の体制を再検討して適切な人事を進めること、地域社会に明確なメッセージで広報活動を行って入学者と就職先の確保に努めることが大切である。</p>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
提起した問題点の具体的な解決案を検討して教授会に提案する。決定後は早急に実施に移す。	

委員会名	自己点検・評価委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎平岡 昇、武内 征司、浦上 弘、佐藤 真治	
年間の活動：	
<p>1) 今年度から委員会名を表記の通り改め、学部長が委員長となることとした。委員会を 6 回開催。</p> <p>2) 平成 19 年度自己点検・評価表を作成した。</p> <p>3) 応用生命科学部として初めての外部評価を実施した。</p> <p>平成 19 年度についての外部評価を平成 21 年 1 月 14 日に実施。評価委員は、濱口哲・新潟大学教授（理学）、寺田弘・東京理科大学教授（薬学）、服部良男・本学名誉教授（食品科学）。評価資料として、平成 19 年度自己点検・評価表、授業評価のまとめおよび平成 19 年度の大学基準協会による大学評価の際に提出したものを使用した。1 月 30 日の委員会で、外部評価の結果を受けて自己点検・評価に関する改善策についてまとめ、来年度の活動に生かすこととした。</p>	
問題点の提起：	
<p>1) 自己点検・評価表の作成について</p> <p>公平さを確保する手段として、授業負担の計算法を統一した方法に改めることおよび記載項目の統一性を図るために記載事項の例示が必要である。</p> <p>2) 外部評価について</p> <p>準備した外部評価資料に基づいて委員会で総括的なコメントを付すことにより、外部評価をしやすくする。</p> <p>3) 前年度の評価を年度内でのできるだけ早い時期に実施してその結果を当該年度にも生かせるようにする。</p>	
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>平成 20 年度自己点検・評価表の作成および前年度に引き続いて 2 回目の外部評価を実施する。</p> <p>平成 21 年の活動の中で、上記で提起した問題点を解消する。</p> <p>Web を利用した授業評価は開始してまだ間ないのでこれを継続し、その効果、利用に関しては担当の FD 委員会に検討を依頼する。</p>	

委員会名	FD 委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	◎武内征司、佐藤眞治、浦上 弘、梨本正之
年間の活動：平成 19 年度に立てた方針に従って、①初年次教育として取り組んでいる「生物、有機科学、無機化学」演習に関して、それぞれの担当グループに 1 年間の取り組みの総括をしてもらい、全教員参加のもと FD 会議を開いた。大部分の教員が参加して、議論を行い、「一定の効果が現れており、次年度も引き続き取り組む必要がある」との結論に達した。②大学院博士後期課程を申請するに当たり、大学院博士前期課程のこれまでの教育を総括して、「博士後期課程の教育はどうあるべきか」の FD 会議を開いた。いろいろと議論が出たが、博士後期課程の教育では少人数になるし、民間企業からの入学者も予想されるので、「教授室などで個別にディスカッションを通じて行う形式を重視する」との結論に達した。	
問題点の提起：FD 委員会の活動は、一昨年の新潟大学教育開発研究センター長の濱口教授の講演会をきっかけに始まったばかりで、具体的な問題としては叙述した二つの課題で、全学部的な FD 会議を開いたに過ぎない。これらの問題では一定の成果があったが、本学部の教育・研究に関する問題は①学生の就職活動について、キャリア教育が 3 年生になって初めて取り組まれるなど、立ち後れている。3 年次の頃に就職活動を始めるときに、自己 PR する事が何もないような学生生活では問題がある、さらに、②ここ 2 年間ぐらい、入学後に 1 年間ぐらいで退学する学生が目立っており、入学後の初年次教育として教科の内容の教育とともに、大学で勉学する目的や動機を把握させることや学生間の交流を促進するためにどうしたらよいかを真剣に考える必要がある。	
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>① 外部評価で高く評価されたウェップサイトによる学生からの授業評価を更に活発にし、教員の授業改善のために役立てて行く。</p> <p>② 初年次教育を更に発展させて、新入生が勉学の動機や目的をつかみ、積極的に授業に取り組むようになる内容を工夫する。</p> <p>③ 就職活動を始めるときに、自信を持って自己 PR 出来るような充実した学生生活を送らせるよう、勉学だけではなくクラブ活動、アルバイトやボランティア活動などを活発にするための工夫をする。</p>	

委員会名	教務委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎波田野義比古 梨本正之 新井祥生 川田邦明 高橋歩	
年間の活動：	
<p>(1) 早期（3年終了時）卒業の要件等に関する教授会申し合せを定めた。</p> <p>これは、これまで学則の規程は有るもの、その実施についての細則が定められておらず、実際に申請者があった場合に対応できない状況を改めたものである。その結果、平成 20 年度 3 月に本学部最初の 3 年終了時卒業生が誕生し、21 年度に本学部大学院博士前記課程に進学した。</p> <p>(2) 初年次教育プログラムを作成し平成 21 年度からの実施を決めた。</p> <p>近年の大学新入生の学習動機の希薄化や学習技術の低下から、本学部でも初年次教育が重要となっており、21 年度から初年次特別プログラムを実施することとした。正規のカリキュラムに載せることができないため、既存科目のコマを借りての暫定的実施であり、専門家不在のため手探り状態であるが、1 年目の経験を基により実のあるものにして行きたい。</p> <p>(3) 転学部試験の実施。</p> <p>平成 20 年度に初めての転学部希望者 4 名に対し、平成 19 年度に定めた申し合せに従い転学部試験を実施し、この 4 名を 21 年度からの応用生命科学部生として受け入れた。</p>	
問題点の提起：	
<p>退職教員の補充が行われず、教員の講義負担が重くなると共に、負担の格差も大きくなっている。</p> <p>近い将来に数名の教授が退職することから、教員組織の再編とカリキュラム改正が必要である。</p> <p>これらの課題については既に将来計画委員会での検討が始まっているが、教員組織がある程度明確にならないとカリキュラム作成は困難なので教員組織再編の議論を急ぐべきであろう。</p> <p>逆に、カリキュラムが不明確では新規教員の募集もできないので、教務委員会としては現行教科目の見直しを進めると同時に、将来計画委員会の議論を踏まえつつ新規科目的開設についても検討を進める。</p> <p>また、講義負担の格差は正については、助教層も含めた負担の調整が必要で、各教員の現状認識と協力が不可欠であるので教務委員会からの情報提供に努めたい。</p>	

平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)

(1) カリキュラム改正に向けた現カリキュラムの見直し作業を進める。

将来計画委員会で検討されている教員組織の再編に対応できる形で、平成 23 年度には新カリキュラムに移行したい。そのために今年度は現行カリキュラムの選択科目の整理の素案の作成を目指すと共に、必修科目についても担当者を含めて新科目の開設と現科目の整理に関する作業を進める。

(2) 初年次教育プログラムの検証

平成 21 年度前期に実施した初年次教育プログラムの成果の検証を行い、22 年度には内容、実施方法共により良いものにする。次のカリキュラム改正時に、新必修科目の一つとして新カリキュラムに組み入れる。

委員会名	学生委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎ 太田 達夫、川田 邦明、重松 亨、三宅 紀子、高久 洋暉	
年間の活動：	
<p>4月 新入生受け入れ、オリエンテーション学生指導、アドバイザーフォロー、新入生歓迎会（学生食堂で行う大学主催と、ホテル新潟で行う学友会主催の2回実施：実行委員会編成を指導）。学友会役員会発足指導（池田嘉奈学友会長）。アスペルガー障害支援チームを昨年度から継続し、科目履修指導、出席チェック表作製、教室への誘導等の支援を行った。</p> <p>5月 学友会の予算執行を事務部の協力のもとに行うこととした。学生駐車場許可証発行（前期分）申請数は前年より減少している。秋葉警察署より講師を招き交通安全講習実施（5/16）。卒業記念パーティ、卒業アルバム委員会編成指導（三宅、高久）。</p> <p>6月 球技大会（6/7,8）を本学と五泉市体育館で実施した。ピアノ寄贈申し込みについて受入可とした。学生部運営委員会で駐車規程を検討（重松、太田）。卒業研究室教員と卒研学生との意見調整を行う。午後11時過ぎに大学構内が暗闇になることについての苦情を受け減灯とすることで調整した。アスペルガー支援会議を母親を交えて実施、RISE 新保さん、五泉あさひの家山崎さんの支援を受けて、アスペルガー障害学生の退学後の後期からの進路等の支援について検討した。</p> <p>7月 日本学生支援機構に1種1年次8名、2年次以降1名、2種1年次20名、2年次以降5名、合計34名を奨学生として推薦した。</p> <p>9月 大学構内に長期間放置されていた自転車を、盗難車届け等を確認の上、（株）バイクオフショーポレーションのエコチャリシステムに参加することとした。</p> <p>10月 学生交通事故多発への対策として、講義開始の最初10分を頂き交通安全指導を実施、マイカー運転、自転車暴走、歩行者の舗道横断を特に注意した。E棟4階女子トイレの盗撮事件への対応（10/4土）。保護者面談会（1,3年生保護者対象、4回目）開催。新薬祭指導（降雨態勢で実施）。</p> <p>11月 3年男子行方不明学生への支援対応（学生課と共に、春3月まで音信不通）。</p> <p>12月 スキースクールを計画（池ノ平）し募集したが、参加者少数で催行中止となった。大学前の学生同士の交通事故対応（12/3 三宅、宮崎）。</p> <p>1月 冬季スクールバスの運行（学生課）。自転車置き場通路の滑り止め防止工事（学生課）。学友会選挙の投票と開票への立ち会い。</p> <p>2月 来年度カウンセリング日程調整（新津信愛病院小林勇先生、矢部保健師）。後援会役員会（応用生命科学部長杯研究室対抗ソフトボール大会の経費補助を申請）。</p> <p>3月 行方不明学生が無事帰宅（3/4）したことについて、父親と今後の対応について検討した。卒業式（卒業記念品選定、学生表彰、卒業証書配布）、卒業記念パーティ（オークラホテル）の段取り計画。翌年度入学式、新入生受け入れ計画、新入生歓迎会計画打ち合わせ。</p>	

問題点の提起 :

1. 他人とコミュニケーションがとれない学生が増えている。他人とコミュニケーションを取りたくない学生が増えている。このような学生が勉強に躊躇いたとき、その解決はかなり難しくなる。
2. 友人は作らない、要らないという学生が増えている。友人よりももっと緩い仲間を形成できる場が必要である。ピアサポート制度の創設が望まれる。
3. 学生駐車場が不足している。今後 2 年間、毎年 200 名ずつ増えるのでますます不足する。
4. 心の健康に問題を抱えている学生に十全に対応できるには、常勤の臨床心理士か、心理担当の教員が必要である。

平成 21 年度の活動目標 : (平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)

1. 学園のハラスメント防止規程が制定され、セクシャルハラスメントに限らず、パワーハラスメント、アカデミックハラスメントにも対応する規程となった。これを実のあるものにしなくてはいけない。
2. カウンセリング室を大学もしくは学園に正式に規定された組織として確立する。そのうえで学生支援の組織を見直す。
3. 学友会が自立して運営を継続できるようにシステムを構築する。このための規程を整備する。

委員会名	入試委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎武内征司、鰯坂勝美、市川雄一、米田照代、佐藤眞治、中村 豊	
教務事務入試係：生野昭雄、長越暁子、布川和明	
<p>年間の活動：昨年と同様に、AO入試、指定校推薦・一般推薦入試、I、II、III期入試、センターA日程及びセンターB日程入試を行った。入試委員会の目標は昨年度よりも受験生を増やすことで、そのために①県内外の指定校枠を広げ、評定値の見直しを行った、②オープンキャンパス時に主要駅にバスを配置し、電車中の宣伝・高校訪問の強化を図り、参加者を昨年度の1.25倍にした、③SPP、SSH、新潟県の事業及び高校教員の研究会などで積極的に高大連携の強化に努め、高校からの出張授業の要請には全て答えた、そして④事務広報課と密接に協力して、ガイダンス及び高校訪問に力を入れた。その結果、AO入試と推薦入試の受験生は昨年と同数、I～III期入試及びセンターB日程入試では昨年度よりも少しずつ受験生を増やし、センターA日程入試で減少した分を相殺して、昨年度とほぼ同じ数の受験生が応用生命科学部を受験し、実質倍率も昨年度とほぼ同じだった。昨年度と若干違ったのは、入学辞退者の割合が減り、入学生が昨年度を13名上回ったことである。</p>	
<p>問題点の提起：上述したように、AO入試から始まりセンターB日程で修了する7種類の入試のうち、センターA日程入試だけが昨年度よりも30数名受験生を減らした。受験生の統一模試などの結果では若干増えることが予想されていたし、他の6種類の入試結果は増加傾向を示したので、今年度の入試委員会の活動を考える上で、重要なポイントであると考えた。センター入試の直前に世界金融危機が勃発し、深刻な世界同時不況が進行したことが受験生の動向に大きな影響を及ぼしたものと判断される。即ち、私学の第2、第3志望校は受験しなかったものと思われる。この傾向は今後も一層強まると考えられるので、経済的な援助制度を創設して入学生への支援態勢を強めるとともに、ホームページや種々のメディアを通じて受験生への学部紹介を更に強化する必要がある。</p>	
<p>平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)</p> <p>上記年間活動①～④を更に強化するとともに、外部評価で指摘されている「就職率の高さと国立大学大学院への進学率の高さの広報」に力を入れる。センターA日程以外の入試で若干ではあるが受験生を増やしているのは、就職率の高さと大学院への進学率の高さが、受験生や高校の先生方に認知されはじめていることを反映しているものと考えられる。そこで、今年度は①～④の強化とともに、これまで弱点があったホームページの充実に重点を置き、センターA日程入試でも受験生を増やせる工夫をする。</p>	

委員会名	入試委員会（広報関係）
委員長及び委員氏名：（委員長に◎、記入者氏名に下線）	
◎武内征司、鰯坂勝美、市川雄一、佐藤眞治、米田照代、中村 豊 事務広報課：星野 恵、斎藤 聰、安中奈々、濱田達郎、加藤三郎	
年間の活動：応用生命科学部広報委員会の活動は、入試に関わる活動即ち受験生と高校の先生への広報活動に集中した。応用生命科学部の最も大きな特徴である「高い就職率と国公立大学大学院への高い進学率」を広報するため、大学のパンフレットの他に応用生命科学部独自のパンフレットを作製した。活躍する卒業生と内定獲得及び大学院進学を決めた4年生を中心にして、現況と大学生活を振り返った「自分史」と受験生へのアドバイスをまとめたものである。これを、高校訪問やガイダンス及び予備校訪問時に受験生や先生方に配布して、「就職力と進学力」の宣伝の武器にした。内容は全て卒業生と在校生が執筆したものなので、先生や受験生には非常に好評だった。新聞や雑誌などの受験媒体を使った宣伝と併せて大きな力になったものと思われる。また、SPP、SSH や新潟県の「理科・技術力向上モデル事業」、大学独自のバイテクセミナー、新潟県主催の中学校の先生方を対象にしたバイテクセミナー、及び出張講義等に積極的に取り組んだほか、高校理科学教育研究会の催しを本学で行い、その際特別講演を担当するなどして高大連携を強化した。教員のプロフィール集も作製した。	
問題点の提起：上記の「受験生に贈る熱いメッセージ」パンフの配布は10月以降だったし、ホームページに掲載したのは年明けの2月頃だった。このパンフを携えて行った高校訪問や特に予備校訪問では、卒業生や在校生の生の声を集めて「就職力と大学院進学力」を具体的受験生に伝えることが、極めて有効であることを強く感じた。また、センターA 日程入試とセンターB 日程入試の間には、受験生の増減に関して劇的な変化があったが、この二つの入試の丁度中間にこのパンフをホームページに掲載したので、何らかの関連があったのかに興味が持たれる。いずれにせよ、昨年度の入試における最大の問題点は、センターA 日程入試における受験生の激減であり、今年度に克服すべき課題と考えられる。	
平成21年度の活動目標：（平成19年度の外部評価を勘案して記入する。） 外部評価でも指摘されているように、「就職力と大学院進学力」を有効に広報することが、今年度の主な活動目標である。そのために、①高校訪問や予備校訪問を通じて、②高校との連携を深めることによって、及び③ホームページや受験メディアを通じて、宣伝を強化する。特に、これまで立ち後れていたホームページの充実を図り、内容を受験生や高校の先生にアピールするものに全面的にリニューアルする。また、好評だった「熱いメッセージ」の今年度版を作製する。	

委員会名	就職委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	◎浦上弘、及川紀久雄、鰯坂勝美、高久洋暁、川田邦明、佐藤眞治
年間の活動：	<p>活動は3年生を対象とした「就職ガイダンス」と4年生に対する就活支援とからなる。ガイダンスは月に1回のペースで12回行い、これ以外に1日会社見学会、インターンシップの実施、学内合同企業説明会があった。4年生への支援は個別的となり、最終的には個々人に就活先を紹介することを行った。また、学生を受け入れていただいている企業を招いて、講演会と懇親会を行う「薬学交流の会」も行った。</p>
問題点の提起：	<p>20年度の大きな特徴としては、夏までは19年度を上回る勢いで内々定を獲得していいたにも関わらず、リーマン・ショック以降求人が途絶えたことである。そのため、その時点で内定を得ていなかった10数名の学生の就活が非常に苦しいものとなった。しかし最終的には104名中99名が内定を得ることができた。このような大きな経済状況の変化に対応するためには、諦めることなく就活を続けるよう学生を支援、激励するとともに、就職先の開拓が必要と思われる。それには、研究や講演活動などを通じて日頃から企業との密な関係を維持していくことが必要である。</p> <p>また、就活の成果が得られにくい学生を早めに見つけ出し、個別に対処することも有効かも知れない。たとえば、内気で人とのコミュニケーションが苦手、就職に対して真剣に取り組む積極性が乏しい、就活から逃避する、自分の将来像が描けず志望職種・業種が絞れない、逆にひとつに希望に固執し自らの進路を狭める、などである。また、3年時の就職ガイダンスの欠席が多い学生も、要注意である。このような学生に対しては、所属研究室の教員と協力して対処することが必要であろう。</p> <p>大学院進学を希望した学生29人は全員進学を果たしたが、卒業直前になって進学を辞退する学生も現れた。明確な目的意識を持たずに進学したためと思われる「不登校」の院生がいることを考えると、大学院が就職からの逃避先になっていることが心配である。</p>
平成21年度の活動目標：	<p>10月から12月までほとんど膠着状態であった内定率の変化も、12月から動きがあり95%の内定率となった。これは学生が諦めずに就活を続けたことが功を奏した。就職を希望する学生はすべて内定を得ることを目標に支援を行うが、21年度は厳しい就職難が予想される。21年度の4年生は、3年次に行うインターンシップへの参加も少なく、積極性の不足が懸念される。学生の就職意欲を高めること、学生に自らの進路を決める決断の大切さを伝えることが重要であり、数10社受けてひとつの内定であるから、不合格というストレスに強い学生を育てる必要がある。</p>

委員会名	図書委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎三宅紀子、中村 豊、重松 亨	
年間の活動：	
<p>両学部の図書委員会と図書館事務で構成する図書館運営委員会を3回開催し、両学部で連携を密にはかった。図書委員会の開催は1回のみであったが、必要な事項については電子メールで意見交換を行いながら決定した。図書予算の大部分を占める学術雑誌については、平成20年度は購入雑誌の見直しは見送ることとした。単行本の購入についてはこれまで応用生命科学部では年に2回程度全教員にアンケートをと委員会で購入する本を決定してきたが、今年度は薬学部もいっしょに図書希望アンケートを実施した。大学院図書予算については、委員会で検討した結果、アイデアを全教員に募ることとし、その中で複数の研究室から希望の出た化学系の事典をかなり高額ではあったが、研究に役立つものと判断し購入することとした。さらに大学院の講義の資料作成に役立つ生命化学系の電子ブックの購読を継続することを決定した。</p>	
問題点の提起：	
<p>ここ数年図書予算削減の努力を続けており、かなり減額を達成できている。学術雑誌の購読については平成21年度にアンケートをとり検討を行う予定であるが、現教員が限られた予算の中で本当に必要とするものは何かをひとりひとりがしっかり考えるべきであると思われる。学生たち（特に大部分を占める学部生）が日ごろの講義・実習等のための勉強に役立つように単行本についても充実させていく努力はしてきたが、図書でわからないことを調べるということが苦手な学生が多いように見受けられる。教務とも連携して授業の中で課題を調べる演習なども取り入れて、より図書館が利用されるような取組みも必要だと考えられる。</p>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>限られた予算の中で全教員、学生のニーズにもっとも応えられるように努力し、研究・教育の向上を図ることができる環境づくりを行うことを目標とする。学部評価での指摘にあるように年々、各学部の図書委員会単独で検討する必要のある事項は減少してきているように思われる。全学の委員会である図書館運営委員会とその分科会としての各学部の図書委員会という位置づけでよいと考えられ、名称はともかく現実にそのような活動になっている。</p>	

委員会名	国際交流委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎及川紀久雄、川田邦明、 <u>梨本正之</u>	
年間の活動：	
教員の海外出張のための資金援助を行った。	
問題点の提起：	
海外での国際学会において発表した成果が論文として公表されていない場合が多いようである。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
過去の論文発表等の業績を考慮して、海外出張のための資金援助を行う予定である。	

委員会名	共通機器・施設委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	◎石黒 正路、鰺坂 勝美、川田 邦明、佐藤 真治、高久 洋曉
年間の活動：	昨年度薬学部との協議により合意した、応用生命科学部が主たる使用者である ESR、電子顕微鏡、X線結晶構造解析装置についての年間保守料を支払った。また、平成 20 年度に発生した保守をしていない機器の修理は 5 件であった。
問題点の提起：	薬学部の機器と応用生命科学部の機器を共通に使用するという以前からの目標は、本年度においても進展が見られない。学部ごとになっている委員会を統合して、より柔軟性のある共通の機器使用が実現するようになるよう充分な協議が必要であると考えられる。
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	両学部の統一した委員会としての活動はまだ始まっておらず、21 年度からの実質的な活動計画を策定する。 応用生命科学部利用共通機器のリスト及び管理者名簿の作成を行い、薬学部利用共通機器リスト及び管理者名簿と統合を行う。

委員会名	倫理審査委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎浦上弘、三宅紀子、梨本正之、市川進一、平山匡男、渡邊賢一(薬学部)、豊島宗厚(学外・新津医療センター病院長)、小林一三(学外・普談寺住職・元新津市長)	
年間の活動：	
<p>20年度には、4件の審査申請があった。うち3件はこれまで申請され、「適」と判断された試験とほぼ同様のプロトコールによる試験であった。しかし、今年度にはいくつかの問題点が指摘され、変更を加えた上で「適」と判定、答申された。残りの1件は内部に倫理審査機構を持たない他大学からの申請であった。共同研究者として本学の教員が参加しているものの、「審査対象外」とした。</p> <p>昨年度より、本委員会には規定などに不備があることが明らかとなっていた。また、薬学部が新津校舎に移転した段階で全学的な委員会を設置することが、規定に盛り込まれていた。そのため、浦上、平山が全学的な委員会をつくる検討会に参加した。</p>	
問題点の提起：	
<p>20年度に変更を必要とした試験は、実習中に学生を被験者とするもので、指摘された問題点のうち最も重要なものは、「一定の強制力を伴う実習の中で、インフォームド・コンセントが必要となる試験を行うことが妥当であるか」ということである。学生を被験者、検体提供者とする実習は医学部などでも行われており、それらを参考にして本学の対応を決めるべきであると考える。</p> <p>学外から申請された試験は研究主体が外部であることから、学部長が試験を許可する現在の審査では責任を負いかねるため「対象外」とした。しかしそれ以外にも、インフォームド・コンセントが事実上とれない幼児を被験者にするなどの問題も含んでいた。</p>	
平成21年度の活動目標：	
<p>21年度からは全学組織の倫理審査委員会が発足し、本委員会は解散する。新委員会の規定はこれまでの規定の不備を補うものであり、円滑に運営されることが期待される。一方で、この数年の委員会活動を通じて感じたことは、教員が人を対象とした研究での倫理を十分に理解していないということである。倫理審査の対象となる研究を行うか否かに関わらず、全教員を対象とした講習会の必要性を感じた。行う可能性のある教員には、放射性同位元素、動物実験などを行う教員に課している年1回の義務講習のような制度が必要かも知れない。また、外部の審査員に重きを置かないと、申請された研究に対して学内から「不適」という判定が出ることになり、無用な軋轢を生むことが懸念される。そのため、外部委員は弁護士など人権に詳しい方、他機関で倫理審査の経験のある方などが必要であろう。</p>	

委員会名	病原体等安全管理委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎ 太田 達夫、 浦上 弘、 小長谷 幸史、 福原 正博、 山口 利男	
年間の活動：	
<p>平成18年12月8日に感染症法が改正され、生物テロの未然防止を目的に病原体等の安全管理体制の確立が法制化された。今回の法改正の目的はバイオセイフティよりもバイオセキュリティに重きがあり、それへの対応が求められた。</p> <p>応用生命科学部の食品微生物・食品安全学研究室では第二種病原体等に該当する病原体等を研究しているため、法令遵守が求められ、厚生労働省と協議の上、新潟薬科大学病原体等安全管理規程の制定と管理体制の確立を目指すとともに、厚生労働大臣に二種病原体等所持許可申請と、病原体等取扱主任者選任届等の届出を行った。</p> <p>規程に基づく管理区域の整備および管理区域利用者に対する教育訓練を実施した。</p> <p>平成21年3月1日に新潟薬科大学病原体等安全管理委員会規程が施行され、平成20年12月1日から適用され、本委員会が正式に発足した。</p>	
問題点の提起：	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 規程を何とか制定にこぎ着けたが、それに沿った実のある管理体制の整備が十全ではない。</li> <li>2. バイオセキュリティに重きがあるため、これに万全を期そうとすると、大学の鍵の管理や警備体制、大学構内の構造に関わる問題が生じる。</li> <li>3. 今後、厚生労働省等による立ち入り査察が予想され、その対応準備を要する。</li> </ol>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 規程に則った管理運営体制を確立する。病原体等のリストを完成させて、保存容器に管理番号などのラベル付けを行う。不足している物品等の調達と調整を行う。</li> <li>2. 学内に向けて病原体等安全管理への理解を広める。管理区域の利用者への教育訓練に関わる資料を見直し、理解しやすく誤解のない資料を作成する。</li> <li>3. バイオセキュリティのために、校舎の整備や、校内の管理方法を検討・整備する。</li> </ol>	

委員会名	防災委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に○、記入者氏名に下線)	◎川田邦明、新井祥生、市川 進一、浦上 弘、中村 豊
年間の活動：	<p>有機廃液の処理（業者委託）を 20 年 5 月 13 日(処理量 2,400 ℥)、8 月 20 日(処理量 2,400 ℥)、10 月 29 日(処理量 2,400 ℥)、及び 21 年 2 月 68 日 (2,400 ℥) に行った。これにあわせて、ドラム缶の購入と、処理費用及び購入費用の支払いに係る手続きを行った。</p> <p>廃液量の増加に伴い、今年度から、廃液保管用ドラム缶 (20 ℥) の本数を 10 本から 12 本に增加了。</p> <p>廃液処理に要する費用変更について業者から提案があり、複数の業者について廃液処理行程について書類確認等行いながら価格交渉を行った。その結果、8 月の処理分から業者を変更した。これに伴い、廃液処理に要する単価を廃液 1 ℥あたり 180 円から 70 円程度に引き下げることができた。</p> <p>昨年度から、廃液保管用ドラムについて缶内容物表示用シールとともにドラム缶が満杯であることを示すシールを貼ることにより、保管の状況が利用者や関係者に容易に判るシステムを継続した。また、従来はドラム缶が全て満杯になった時点で業者に処理を委託していたため、業者の対応状況によっては処理までに時間を要する場合があった。そこで、処理に至る手続きを円滑化するために、ドラム缶のうち 10 本が満杯になった時点で担当者を経由して業者に委託するシステムを試行することとした。</p> <p>廃液の漏出時の対応用としてクリアスピルキット (1 セット) を購入した。あわせて、マニフェスト等関連書類保管用並びにシール作成等のための事務用品を購入した。</p>
問題点の提起：	<p>平成 19 年度の外部評価において、防災訓練、地域との連携、地震等での教育ラインの整備などとともに、防災、環境問題に対する全学的取り組みの必要性、並びに委員人数の削減についてコメントを頂戴している。これらについては、正に全学的取り組みが必要であり、別途検討されている。廃液処理については、現在、薬学部も含めた全学部の廃液を一括処理しているところであるが、これは、新津キャンパスに応用生命科学部が設立された後、薬学部が同キャンパスに移転したためである。したがって、廃液処理に関しても、今後の全学的取り組みの中で協議してゆく必要があるものと考えている。</p>

平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)

20年度に試行した手順で有機廃液の処理（業者委託）を行う予定である。その結果に応じて、必要に応じて改良を加えたいと考えている。また、内容物表示用シール及び満杯表示用シールについても、引き続き作成と使用を行う予定である。

19年度の外部評価において、「利用者（学生・研究者）に対するガイダンスは行わないのか？」とのコメントを頂戴している。利用者については職員に限定（学生については職員の立会のもと職員の責任で利用）しているので、メール等によりその旨の徹底化を図ったところである。現行では特に問題等は生じていないが、21年度については必要があればガイダンス等を行うことも視野に入れて活動したいと考えている。

# 全学委員会

委員会名	ホームページ(HP)委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎中村辰之介、 <u>中村 豊</u> 、齋藤 聰	
年間の活動：	
<p>本年度は5月に HP のトップページの大幅なリニューアルを行ったのを皮切りに HP のデザイン更新を行った。さらに8月には更新プログラムが導入され、これまで業者に委託していた更新作業を学内で行えるようになり、新着情報の更新などが迅速に行えるようになった。また、これに伴い本年度からオープンキャンパスのインターネット参加申込、入学試験のインターネット出願、入試合格者のインターネット発表も実施した。インターネット出願の数は決して多くなかったが、入試合格者のインターネット発表には相当数のアクセスがあった。I期入試の合格発表では、PC 用サイトを携帯電話で閲覧しようとしている訪問者が多かったため、携帯電話で本学 PC サイトを閲覧しようとする訪問者を本学携帯サイトへ自動的に誘導するように修正を施した。</p> <p>各種委員会に関連するコンテンツが少しずつではあるがアップされるようになった。例えば、応用生命科学部の教員プロフィールや卒業生と在学生から受験生に向けたメッセージなどがあげられる。</p> <p>業者を含めた委員会を月1回の頻度で開催し、業者からの本学 HP のアクセス解析の報告を受け、その結果の分析を行った。検索エンジンの順位およびページビューの年間推移を見てみると、ページビューはホームページのデザイン更新後は大きく増加する傾向が見られたものの、検索エンジンの順位およびページビューともに昨年度と比べ大きな変動はなかった。本年度末には、検索エンジンのヒット率の向上を目指し、本学サイトに用いるタイトルや文章に「大学」、「科学」、「薬科」、「応用」などの単語を多くする工夫をした。また、教授会等で研究室 HP の更新や HP の素材となるトピックの提供をお願いした。</p> <p>学内専用の Cyber-NUPALS のページでは、講義の音声ファイルや講義資料等がアップロードされている。多い月には 6000 ページビュー近いアクセスがあり、学生の学習に活用されている。</p>	
問題点の提起：	
<p>更新プログラムの導入により昨年度に比べてコンテンツが充実するとともに新着情報の更新の頻度が格段に向上した。しかしながら、HP の常にリニューアルしていくかないと見られなくなってしまう。新しい情報を発信するだけでなく、定期的なデザインの変更も必要であろう。</p> <p>各種委員会から発する内容をさらに充実させる必要がある。学生委員会関連では、学生生活に関するコンテンツの充実、入試委員会関連では、入試過去問題集の公開、教務委員会では、シラバスの公開、広報委員会関連では、模擬講義のための教員プロフィール一覧や卒業生の活躍を公開などが必要である。また、本学 HP は日本語版のみで稼働しているが、外国人留学生のために英語版の立ち上げ</p>	

も必要であろう。

現在、PC 用サイトと携帯用サイトは別々に稼働している。そのため、入試合格発表など同時に同じ内容を公開する際に不都合が生じており、協調性を持ったシステムの構築が望まれる。

すでにほとんど研究室 HP が立ち上がっているが、未だに HP がない研究室や 2007 年頃から更新していない研究室がある。HP の設置と更新頻度の改善について折に触れて依頼するしかない。

平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)

トップページのデザインの変更を行うとともに、コンテンツのさらなる充実を図る。また、検索エンジンヒット率アップのための HP 文書作成を継続する。英語版 HP の作成を検討する。海外の留学希望者が対象となるので、トップページ、大学の概要、アクセス、各研究室 HP へのリンクなど必要最低限のページ構成でよいと思われる。さらに PC サイトと携帯サイトの統一についての検討を開始する。

とにかく HP の充実が第一であり、そのために HP 委員会は各教員や各委員会に積極的に働きかけていく。

委員会名	IT 委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
(応用生命科学部) 浦上 弘、高橋 歩、 <u>◎米田 照代</u> 、(薬学部) 浅田 真一、福本 恭子、神田 循吉、(事務部) 生野 昭雄、(図書館) 図書館長 武内 征司、白鳥 寛、(法人本部) 杉崎 亮	
年間の活動：	
<p>① 今年度から学生便覧に「IT 環境について」の記載を設けた (事務部と共同)。</p> <p>② オリエンテーションで両学部 1 年生・院生に、情報実習室、無線 LAN、メールアドレスなどの説明を、1・4 年生にノートパソコンの推薦を行った。また、ログオン講習・履修登録の会を行った (事務部と共同)。</p> <p>③ 情報実習室にプリンタ管理ソフトを導入し、学生のプリンタ利用枚数の制限を開始した (9 月開始)。</p> <p>④ 情報実習室のパソコンを入れ替えた (閉室 8/25~9/17)。これにより、OS WindowsXP→WindowsVista、PC 45→77 台、プリンタも入替 4→4 台 となった。予算はサイバーキャンパス推進事業の補助金が活用された。</p> <p>⑤ 上記の入替で不要になったパソコン 40 台、プリンタ 4 台を各研究室の希望に従い無償で配布した (11 月中旬)。当初は残りを学友会 (各サークル含む) に無償配布する予定だったが、こちらに回る分はなかった。</p> <p>⑥ CBT トライアルに備えてキャンパス LAN のファイアウォールの解放ポートの精査を行った (CBT 委員会、事務部、業者と共同 9/25)。</p> <p>⑦ 学内で複数のサーバ導入が計画されており、それへの対応が必要であるという議論に基づき、「情報セキュリティポリシー」と「情報ネットワーク利用ポリシー」を制定した (3/13 部局長会で成立)。</p> <p>⑧ 学内のパソコンでUSB メモリを媒体として感染するコンピュータウイルスが検出された (2 月中旬)。これに対処するために学内の全てのパソコンと USB メモリを対象としたウイルスチェックを行った (業者に依頼、第 1 次 3 月下旬実施、第 2 次は年度を越えて 2009 年 4 月下旬～5 月上旬実施)。</p>	
問題点の提起： IT の活用が広がり、その内容も多岐に亘るようになっている。IT 委員会は、接続回線や IP アドレス、ポートなど広い意味での資源の管理、および利用規程の整備など、IT 利用の基盤の部分を担ってユーザ (教職員、委員会など) を支援したい。その上の実際の管理や個々のユーザに対する技術面での支援は、大学の管理部門の業務として取り組むべき内容であると思われる。IT 活用の基盤の整備、および管理部門との連携のあり方が問題点として提起される。	
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。) 現在、IT 委員会の予算はインターネット回線接続料と LAN の保守費に限定されており、例年補正予算や年度末に他の予算単位から不足分を補っている。これを予算化したい。外部評価のコメントは広範な内容を含んでいるので、時間をかけて検討し対処していきたい。	

委員会名	安全衛生委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に○、記入者氏名に下線)	<u>梨本正之</u>
年間の活動：	特になし。
問題点の提起：	特になし。
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	学内において安全衛生上の問題が生じた場合に、委員会を開き解決策を検討する予定である。

委員会名	サイバーキャンパス推進委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
(薬学部) ◎杉原 多公通、上野 和行、高中 紘一郎、神田 循吉、(応用生命科学部) 浦上 弘、新井 祥生、 <u>米田 照代</u> 、(事務部) 茂木 弘邦、生野 昭雄、(図書館) 白鳥 寛	
年間の活動：	
<u>応用生命科学部関連事項のみ</u>	
<p>① パソコンソフトウェアの違法コピー排除に向けた取り組みとして、マイクロソフト社、およびケンブリッジソフト社とソフトウェア包括契約を結んだ。本学の学生および教職員は、これらの2社のソフトウェアを無制限数だけダウンロードしてインストールできる。期間は1年間。</p> <p>② 補助金を利用するソフトウェア購入のとりまとめを行った。これを利用すれば各研究室は約半額でソフトウェアを購入できる。</p> <p>③ 情報実習室のパソコンの入替に合わせ、学内各研究室に希望に応じてパソコンを約半額の価格で提供した（半額はサイバーキャンパス整備事業による補助）。</p> <p>④ 前年度に作成された授業の音声ファイルなどのサイト Cyber-NUPALS は継続して運営されている（運用開始は 2008/1/15）。</p>	
問題点の提起：	
<p>① この委員会は、文科省に申請して採択された「サイバーキャンパス整備事業」(H19～H21 年度までの3年間) の遂行のために設立された。今年度は2年目にあたる。上記の活動はいずれもこの事業の補助金を利用したものである。来年度までは予算の裏付けがあるが、それ以降については資金の手当が必要となる。</p> <p>② 活動の④に示している Cyber-NUPALS は、上記の整備事業の中で最も多数の教員が参加する柱となる事業であるが、まだ音声ファイルの提供などが十分進んでいない側面もある。進展の次第によっては補助金の削減・返還につながり得るので、これを充実させる必要がある。</p>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
Cyber-NUPALS の充実および拡充（キャンパス外からのアクセスの検討を含む）、ソフトウェア購入のとりまとめ、セキュリティソフトの導入の検討など	

委員会名	ハラスメント防止委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎長友 孝文 (学生部長)、北川 幸己、 <u>平岡 昇</u> (学部長)、鈴木 正利 (事務部長)、太田 達夫、飯村 菜穂子、長越 曜子 (ハラスメント相談員)、矢部 典子 (保健室職員)	
年間の活動：	
<p>平成 19 年度に実施された大学評価の中で、大学基準協会からセクハラだけでなくパワハラ、アカハラも含めたハラスメント規程の整備の必要性が指摘されたことを受け、第1回部局長会（4月18日）において大学にハラスメント委員会（仮称）を発足させた。学長が委員長に平岡応用生命科学部長を、副委員長に北川薬学部長を指名した。委員会では、まず、法人の「セクシャル・ハラスメントの防止等に関する規程」（平成14年1月9日制定）を再検討して各種のハラスメントの防止に努めるような規程に改正することを法人事務局に要望し、その規定を受けて大学のハラスメント防止規定を制定し、委員会を正式に発足させることとした。</p> <p>第5回理事会（11月14日）において「学校法人新潟科学技術学園ハラスメント防止等に関する規程」および「学校法人新潟科学技術学園ハラスメントに係る懲戒処分ガイドライン」（いずれも平成20年12月1日施行）を決定し、「ハラスメント対策リーフレット」を承認した。</p> <p>この理事会決定を受けて、第7回部局長会（11月27日）で「新潟薬科大学ハラスメント防止委員会規定」（平成20年12月1日）が制定された。この規定に基づいて上記の委員で構成される新潟薬科大学ハラスメント防止委員会が発足した。平成21年度版学生便覧に「ハラスメント防止の手引」を掲載し、学生に対してハラスメント防止を呼びかけるとともに相談の方法や相談先を示した。</p>	
問題点の提起：	
ハラスメント一般に関する規程が制定されて大学の委員会は発足したが、その後の実質的な活動が行われていない。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
学生及び教職員を対象とした各種ハラスメントに関する認識の喚起と防止を促す具体的な取り組みを検討して実施に移す。	

# センター(全学)

委員会名	産官学連携推進センター運営委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎小西徹也、川田 邦明、浦上 弘、渡辺 賢一 (薬学部)、中村 辰之介 (薬学部)、平山 匡男	
年間の活動：	
<u>1. 相談受付</u>	
一般企業 ・・・・・・ 8件	
地方自治体 ・・・・・・ 4件	
財団法人 ・・・・・・ 1件	
商工会議所 ・・・・・・ 1件	
<u>2. 共同研究プロジェクトの立ち上げ</u>	
一般企業 ・・・・・・ 3件	
商工会議所 ・・・・・・ 2件	
<u>3. 学官連携</u>	
<u>4. コンソーシアム（共同事業体）の設置</u>	
①食育をテーマとした研究連携コンソーシアムへ拠点校として参加 ((財) 日本私立学校振興・共済事業団「研究連携コンソーシアム形成支援事業」採択)	
②新潟県内の大学連携コンソーシアムへ連携校として参加 (文部科学省「戦略的大学連携支援事業」採択)	
<u>5. 地域貢献プロジェクトへの参画</u>	
① I P C財団・新潟エリア産官学連携協議会	
②産官学連携協議会	
③地域資源活用推進委員会 (中小企業庁「地域資源∞全国展開プロジェクト」採択)	
④ J A P A Nブランド・花のまち・地域ブランド創出事業委員会 (中小企業庁「J A P A Nブランド育成支援事業」採択)	
⑤大学連携新潟協議会 (新潟市・8大学連携事業)	

## 6. 知的財産管理体制の構築

- ①知財アドバイザーおよび知財ワーキンググループによる知財管理体制の構築活動  
((独) 工業所有権情報・研修館「大学知財アドバイザー派遣事業」採択)
- ②日本海地域大学イノベーション技術移転機能【KUTLO-NITT】への参加  
(経済産業省「創造的产学連携体制整備事業」採択)

## 7. 産学連携イベントへの出展

- ①産学官連携推進会議（主催 政府、日本経団連、日本学術会議他）
- ②ジャパン・インターナショナル・シーフードショー（主催 大日本水産会）
- ③アグリビジネス創出フェア 2008（主催 農林水産省）
- ④新潟国際ビジネスメッセ 2008（主催 新潟市他）

上記プロジェクト推進のチェックと確認を行い、両学部と連携推進センターの連携を図った。

問題点の提起：

産学官連携プロジェクト、共同研究依頼の増加により学内の研究者、研究室の反応が逆に減少（慣れ）している現状がある。これは学内の各研究室の余録がないことも原因があるので、センター自体に持ち込まれた問題の瀬踏みができる体制を整えて行く必要がある。

平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)

外部との共同研究体制の一層の構築推進を図る。

## 施設・管理(全学)

委員会名	図書館運営委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線) ◎ <u>武内征司</u> (図書館長)、大野 智、皆川信子、星名賢之助 (以上薬学部)、三宅紀子、中村 豊、重松 亨 (以上応用生命科学部)、白鳥 寛、瀧澤紀子、五十嵐芳美 (図書館)	
年間の活動：前年度の方針に従って、外国雑誌類の電子ジャーナル化をほぼ完了させた。また、文科省からの補助金を用いて、教育研究情報利用支援システムの充実を行った。学内外の利用者を対象にした活動と他の図書館との協力関係を強化する取り組みを別表にまとめた。	
その結果、図書館の年間利用者は一昨年に比べ増加し述べ20万人台を回復した。一方、外部からの利用者の数は過去2年間の80名前後から160名へとほぼ倍加した。外部の利用者は、他大学や企業関係者が多く専門書や外国雑誌の閲覧者が目立っている。	
外国雑誌等の見直しについては、①平成20年度に退職する教員が数名おり、また新しく赴任する教員もいること、②平成18年、19年度と続けて見直しを図り、電子ジャーナル化などが進み一定の成果が現れたことから、次年度にまとめて見直しを行うことにした。	
問題点の提起：学内の図書館利用者の数は県内の他大学に比べてかなり高いが、本来図書館を利用して勉学すべき学生が、隣接する食堂で勉強している。その数は優に図書館を利用する学生の数倍に達すると思われる。図書館ではなく食堂を利用するには、学生どうしが話をしながら勉強出来るからというのがその理由である。これらの潜在的な利用者が、静かな環境で勉強する習慣を身につけるように工夫が必要であろう。	
外部利用者が大学や民間企業の研究者が多く、一般市民が少ないので本学の図書館蔵書の構成が偏っていることからやむを得ない面がある。むしろ、科学に関する入門書等を充実させて、中高生や一般市民などの初心者が利用出来るようにすることが必要かもしれない。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。) ①今年度は、昨年度に見送った外国雑誌の見直しを行い、教員の構成の変化に対応するとともに、外国雑誌にかかる費用の節約を図る。②外部からの利用者の増加傾向を一層強化するために、昨年度行ったホームページでの宣伝を更に強めるとともに、中高生や一般市民が注目するような内容にする。さらに、区報やFM放送の利用を活発にする。③学生が図書館で静かに勉強する習慣を身につけさせるには、どうしたらよいかという問題を取り組む。④日本薬学図書館協議会研究集会（8月27－28日）を成功させるとともに、他大学等の図書館との協力関係を強化する。	

## 平成20年度 新潟薬科大学図書館運営委員会等行事

### 第1回 図書館運営委員会

日 時 : 平成20年5月1日(木) 午前11時00分から

場 所 : A棟会議室2

出席者 : 武内征司(図書館長)

　　薬学部 : 大野智、

　　応用生命科学部 : 三宅紀子、中村豊、重松享

　　図書館 : 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)

議題 (1) 平成19年度決算と平成20年度予算について

(2) 外国雑誌について

(3) その他 図書館の利用状況について

### 第2回 図書館運営委員会

日 時 : 平成20年10月10日(金) 午後2時30分から

場 所 : J棟図書館事務室

出席者 : 武内征司(図書館長)

　　薬学部 : 星名賢之助

　　応用生命科学部 : 三宅紀子、中村豊、重松享

　　図書館 : 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)

議題 (1) 平成21年度特別事業費について

(2) 平成21年度予算について

(3) 2009外国雑誌、DBと補助金について

(4) 新潟薬科大学図書館キャンパスにあるバックナンバーについて

### 第3回 図書館運営委員会

日 時 : 平成20年11月5日(水) 午前11時30分から

場 所 : J棟図書館事務室

出席者 : 武内征司(図書館長)

　　薬学部 : 大野智

　　応用生命科学部 : 三宅紀子

　　図書館 : 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)

議題 (1) 平成21年度予算について

(2) 図書購入について

### 第14回新潟県大学図書館協議会総会出席

日 時 : 平成20年7月3日(木)

会 場 : 新潟医療福祉大学(新潟市)

出席者 : 武内征司図書館長、白鳥寛

## 平成20年度新潟薬科大学図書館の主な出来事

1. 平成20年度私立大学等経常費補助の教育・学習方法等改善支援で補助金を受けた。  
課題名：時間外開館による学生の学習、外部利用者の生涯学習、研究支援と蔵書点検  
3年間で、合計 7,350千円
2. 高度情報化推進：平成20年度教育研究情報利用支援で補助金を受けた。  
教育研究情報利用支援（電子ジャーナル、データベース等） 17,776千円
3. 本学で購入している外国雑誌の全て（約400誌、含むコンソーシアム）を電子ジャーナル化した。ただし、Nature、Scienceについては、館内での学生の閲覧用としてプリント版も電子ジャーナル版と併せて購入。
4. パソコン（学生利用、O P A C、図書館センター業務用等）15台の更新を学内のサイバー・キャンパス事業の一環として行った。図書館システム LVZ の端末を Vista 版対応にした。  
図書館の古いパソコンは学内の希望する研究室に配布して、再利用している。  
大学では、Microsoft 社とアグリーメント契約を、一方、ケンブリッジ社と包括契約を結び、教員、学生、院生は無償で、Microsoft 社の Windows XP、ChemBio Office Ultra 等を無償で利用することが可能になった。
5. 図書館のファイル・サーバーの更新を行い、ファイル・システムの導入を行った。  
図書館の事務用文書を館員が共通に見られるようにして、これまで以上に便宜を図った。  
ファイル・システム : ゼロックス DocuShare
6. 平成20年度新潟県大学図書館協議会研修会の会場校となり、多数の参加があった。  
日 時：平成20年11月26日（木）14:00～17:00  
会 場：本学B棟203教室 参加者：18機関、29名  
内 容：リポジトリについて
7. 平成21年度日本薬学図書館協議会の研究集会を開催することになった。  
期 日：平成21年8月27日（木）、28日（金）  
会 場：27日は本学B講義棟、28日は日航ホテル  
参加者： 薬科系、医療系大学図書館職員、製薬企業図書室職員、加盟機関職員等
8. 学内で、学生、院生向けに各種講習会を開催し、外部からの複数の参加者もあった。  
SciFinder Scholar：平成20年8月5日（火） 講師：化学情報協会福井啓次郎氏  
エルゼビア S D：平成20年12月4日（木） 講師：アイセス 河合晋氏  
医学中央雑誌：平成20年12月9日（火） 講師：紀伊國屋書店 平山恵三氏  
PubMed、EndNote 講習会：平成21年3月25日（水） 講師：ユサコ 柿沼大輔氏

委員会名	放射線安全管理委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎安藤昌幸、宮本昌彦、梨本正之、新井祥生、鈴木正利、神田優作	
年間の活動：	
<p>4月 定期健康診断、教育訓練。</p> <p>5月 RI 施設、RI 廃棄物搬出。</p> <p>6月 平成19年度放射性同位元素管理状況報告書提出。</p> <p>9月 RI 施設液体シンチレーションカウンタ更新。</p> <p>9月 RI 施設およびX線発生機器、定期点検。</p> <p>10月 定期健康診断。</p> <p>2月 次年度委員の交替議決</p> <p>3月 RI 施設およびX線発生機器、定期点検。</p> <p>3月 RI 施設、防犯ビデオ設置。</p>	
問題点の提起：	
<p>放射線安全管理委員会は、新潟薬科大学のRI利用施設及びエックス線発生装置の、施設、装置、使用者を主な管理対象とする大学の委員会である。使用者の安全性を確保することと、放射線関連事案による新潟薬科大学のブランドイメージ低下（特に近隣住民に対して）を防止することを最大の目的とし、関連する法令や学内規程を順守して管理活動を行っている。</p> <p>RI利用施設本体は、新築後の利用開始（2006年度）から2年以上を経て初期トラブルはほぼ解決し、安定的に運用されている。その一方、一部の装置や機器の経年劣化が問題となり、本年度は液体シンチレーションカウンタ更新を特別事業（予算規模約900万円）として行った。想定外の機器や施設の修繕や更新に、単年度予算方式では迅速に対応できない場合もあるため、この点は注意すべきである。</p>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>今後も安全性を確保しつつ、RI施設およびX線発生装置の利用を増やし、大学の教育研究への貢献を高めていくことが重要な課題であると考えている。</p>	

委員会名	放射性同位元素利用施設運営委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎ <u>安藤昌幸*</u> 、宮本昌彦*、梨本正之、新井祥生、鈴木正利、神田優作、高久洋暁*、西田浩志*、渡辺賢一、浅田真一*、大貫敏男*	
*: 防災委員（緊急時対応と月度の環境測定および清掃を担当）	
年間の活動：	
毎月度の環境測定（施設内外の空間線量測定）。	
毎月度の施設清掃。	
4月 教育訓練。	
5月 R I 廃棄物搬出。	
9月 液体シンチレーションカウンタ更新および使用教育訓練。	
1月 R I 貯蔵室冷凍冷蔵庫更新。	
3月 防犯ビデオ設置。	
問題点の提起：	
R I（放射性同位元素）利用施設運営委員会は、新潟薬科大学のR I利用施設の保守管理業務、教育研究業務などの遂行を目的とする大学の委員会である。放射線安全管理委員に加えて、R I利用研究室の責任者が委員となっており、主な委員会活動は、6名の防災委員により行われている。	
防災委員は、多大な研究教育活動や他の学務に加えて本委員会活動を行っており、所属研究室のR I適正使用の責任も負っているため、負担は少なくない。委員自らが行うR Iを利用した教育研究に伴う応分の義務を負うのは当然であるが、委員会活動の効率化などによる負担の軽減が重要な課題であると考えている。なお、本年度から緊急事態対応要領（案）を作成して試用中であり、問題がなければ施設の内規あるいは大学の規定とする予定である。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
20年度から緊急事態対応要領（案）を作成して試用中であり、問題がなければ施設の内規あるいは大学の規定とする予定である。	

委員会名	動物実験委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
委員長： <u>◎尾崎 昌宣(薬) (施設長)</u>	
委 員： 渡邊 賢一(薬)、若林 広行(薬)、 佐藤 真治(応)、市川 進一(応)、三宅 紀子(応)	
年間の活動：	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実験動物施設の日常管理、清掃、廃棄</li> <li>・ 新規程についての利用者講習会の開催</li> <li>・ 慰霊祭の開催</li> <li>・ 内外の個人、組織、団体からの問い合わせ、連絡、情報に対する広報及び授受・応答</li> </ul>	
問題点の提起：	
<p>日常の管理業務が第一であり、利用者に快適・清潔かつ便利に、利用者の負担を出来るだけ少なく利用できるように心がけている。日常の管理は、各利用者の責任により動物の飼育・管理がなされているが、個人によってそのハードルが異り、必ずしも統一されていない。現在、清掃当番は各研究室毎に決めているが、利用者の負担を軽くするため、施設長が定期的に清掃・片づけ作業を行っている。共同の場合は、ハードルの相違が各人の利用を難しくしたり、室内環境の悪化を招くことから、特に清潔上一定のレベルを保つためには、これらの作業を行う人員の確保・配置が必要である。そのための経費が必要であるが、使用動物、飼料については既に自己負担（受益者負担）でまかなわれており、屍体の廃棄、洗剤、白衣の洗濯、ケージ補修、ラベル、ビニール袋、給水フィルター・ノズルなどの受益者負担分の分割識別が難しいものは、共通費用でまかなっている。したがって、受益者負担により算出される額を作業員等の人工費にあてることは難しい。この解決策として、利用研究室以外に、大学院生のアルバイト補助を雇用することも考えられる。</p>	
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>本年度は、文部科学省によって提示された基準・規程に基づいた新規程の運用を開始し、この運用の円滑な運営を軌道にのせることが中心業務であった。しかし運用開始後、実験実施者にとって不便なことがいくつか明らかになってきた。特に、動物実験計画書の提出と実験実施日が逼迫することが多く、実験遂行に支障がでることがあった。また、事務作業もかなり複雑化し、利用者の書類作成などの負担がいっそう大きくなった。このような負担を少なくし利用しやすくすることを念頭において、速やかに運用を進めていくためには、本学の実情に沿った独自の方法を考案することが必要であろう。来年度（21 年度）は、これらの問題点を少しでも改善したい。</p>	

委員会名	組換え DNA 実験安全委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎ <u>高久洋暁</u> 、市川進一	
年間の活動：	
<p>組換え実験申請書の審査</p> <p>教授会において、組換え実験後の実験材料及び器具の適切な処理の注意呼びかけ</p>	
問題点の提起：	
特にない。	
平成 21 年度の活動目標：(平成 19 年度の外部評価を勘案して記入する。)	
最近、他大学において組換え実験後の材料及び器具の処理の問題が表面化して問題が起こってきてることから、本大学においても注意呼びかけをして安全に組換え DNA 実験が最後まで行われるように努めていきたい。	

# 研究科の委員会

委員会名	研究科入試委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎石黒 正路、米田 照代、重松 亨	
年間の活動：	
<ol style="list-style-type: none"><li>1. 大学院博士前期課程入試をスケジュールどおりに推薦、一次（9月7日）、および二次試験(3月6日)を実施した。</li><li>2. 10月末に博士後期課程設置が認可されたことに伴い、博士後期課程の一般・社会人特別選抜入試の選抜方法を検討して募集要項を作成し、入学試験を前期課程二次試験と同日に実施した。</li><li>3. 昨年からの課題として出題問題の内容の重複を避けるために、前期課程一次、二次試験問題を問題提出者から同時に提出していただき、それぞれの内容を確認して重複の有無を確認した。一部に重複が見られたため問題の差し替えをお願いした。</li><li>4. 博士前期課程および後期課程の入試とともに、各研究室から少なくとも1名が出席した面接を行った。受験者が多かったため時間的な余裕がみられなかったが、概ね順調に行うことができた。</li><li>5. 前期課程および後期課程の両方の募集要項を外国人の受験に対応できるように修正した。また、外国人の試験のための英語版のapplication formを高橋准教授の協力を得て作成した。また、専門科目の出題では担当教室からの英語問題を作成して、試験を行った。</li></ol>	
問題点の提起：	
<p>外国人の入学金および授業料の免除についてその内容を設定したが、対応する学内からの進学者や学外からの入学者についてこれら費用の減免を検討し、大学院生の勉学、研究意欲を高めることも必要と考えられる。</p>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<ol style="list-style-type: none"><li>1. 大学院生の経済的支援の方策を検討する。</li><li>2. 大学院の広報の体制および方法について検討する。</li><li>3. 編入学制度について検討する。</li></ol>	

委員会名	研究科教務委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎梨本正之、高久洋暁、 <u>三宅紀子</u>	
年間の活動：	
<p>修士課程2年生の学生のために、7月に中間研究発表会を行い、3月には最終研究発表会および論文審査を行った。</p> <p>博士課程の種々の教務関連規定を整備した。</p>	
問題点の提起：	
特になし。	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>講義および研究の質を高め、世界標準レベルの大学院教育を行う。博士後期過程に進む予定の学生には、将来、独立して研究ができる能力を身につけさせるために、前・後期一貫した教育を行う。科学の共通言語である英語の能力全般の向上を図る。</p>	

委員会名	博士後期課程設置委員会
委員長及び委員氏名：(委員長に◎、記入者氏名に下線)	
◎浦上弘、武内征司、川田邦明	
年間の活動：	
<p>19年度には薬学部の定員超過のため設置申請を見送り、20年度に改めて申請を行った。そのため時間をかけて申請書類を見直すことができ、文科省からの申請内容の不備などの指摘は少なくてすんだ。しかし、1年遅れたためにいくつかの問題が生じた。ひとつは、20年度入学を希望していた学生が行き場を失ったことである。もうひとつは、完成年度が1年先になったことにより、定年のため申請できない教員が出たことである。教員数には余裕があったので、問題にならなかったが、その教員を指導教員として進学を希望する学生の処遇に問題が生じた。</p>	
<p>20年度に入学を希望していた2名の学生は、薬学部の博士後期課程に入学した。2学年目からの処遇について応用生命後期課程が認可された時点で学生に質したところ、一人はそのまま薬学部に在籍することを希望し、一人は応用生命に転研究科することを望んだ。そのため、文科省に開学時に2年生を受け入れができるような申請変更ができるか問い合わせたが、返答は不可であった。しかし、修学年限短縮規定を適用して2年で博士号を取得することは可能であるとの示唆を得た。そこで学生は薬学部大学院を中退し、新たに応用生命の後期課程の1年生として入学して2年での学位取得を目指すことになった。</p>	
<p>申請から外れた教員の指導を希望していた学生は、もとより21年度に入学することになっていた。そのため、3年時には教員の指導を受けられなくなることが確実であったが、後任の教員が指導を引き継ぐことが期待されていた。しかし、教員としての申請ができなくなったために、進学を希望する研究室に後期課程の教員が不在になってしまった。そのため、志望する研究室を換えて進学することになった。</p>	
問題点の提起：	
<ol style="list-style-type: none"> <li>認可が1年遅れたため、上に述べた問題が生じた。いずれも一応の解決を見たため、大きな問題とはならなかったが、教育機関としての学生に対する責任の重さを痛感した。学生の一生を左右しかねないので、大学の運営は慎重であるべきである。</li> <li>文科省の方針を受けて、申請内容は我々教員が院生であった頃の大学院と比較して、講義のカリキュラムがあるなど大きく異なるものであった。この申請内容について研究科委員会、教授会で討議を行ったが、議論が深まったように感じず、委員会が提案した形で申請することになった。大学院のありかたについての全学部的なコンセンサスの形成は、今後の課題であると感じている。</li> </ol>	
平成21年度の活動目標：(平成19年度の外部評価を勘案して記入する。)	
<p>1年遅れたが設置が認可され、6名の入学予定者を出すことができた。2年にわたり文科省と折衝を続けたため、事務職員も「対文科省対応」に慣れてきたように感じられ、今後の戦力となることを期待している。最大の問題は学生の就職であり、現在大学院には就職委員会はなく、学部の委員会が院生就職の集計処理を行っているが、大学院としての就職対策が必要である。</p>	

# 資 料

- 授業担当時間
- 委員会等担当
- 研究業績

平成20年度の授業担当時間・委員会等負担・研究業績一覧表 【応用生命科学部】

	市川	梨本	石黒	平岡	及川	武内	波田	太田	小西	浦上	鰐坂	平山	高久	米田	川田	中村	佐藤	三宅	重松	新井	高橋	伊藤	田宮	相井	西田	永塚	上野	小長谷	宮崎	小島	中野				
職位	教授	准教授	助教	助教	助教	助教	助教	助教	助手	助手																									
1週間の授業時間数	7	5	4	6	6	7	11	8	5	6	7	2	6	4	6	9	4	7	4	9	14	3	3	6	3	3	5	3	6	4	0				
部局長会			○		○	○	○	○	○	○																									
教授会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
大学院会		○	○	○																															
研究科委員会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○												
<b>学部委員会</b>																																			
予算委員会			◎		○																														
将来計画委員会			◎		○	○	○	○	○	○	○																								
自己点検・評価委員会			◎	○			○														○														
FD委員会（大学院兼任）	○		◎			○														○		○													
教務委員会	○			◎																○		○	○												
学生委員会						◎														○	○	○	○												
入試委員会	○			◎								○			○		○		○	○	○														
就職委員会					○						◎	○		○		○		○																	
図書委員会																				○	◎	○													
国際交流委員会	○		◎																	○															
共通機器・施設委員会			◎									○		○		○		○																	
倫理審査委員会	○	○									◎	○								○															
病原体等安全管理委員会						◎																													
防災委員会	○										○						◎	○			○														
<b>全学委員会</b>																																			
学長諮詢委員会												○		○	○																				
広報委員会							○				○																								
H.P.委員会																				○															
IT委員会							○				○			◎							○														
学生部運営委員会								○	○						○					○															
安全衛生委員会	○																																		
サイバーキヤンバ推進委員会											○			○								○													
ハラスメント防止委員会			○		○																○														
<b>センター（全学）</b>																																			
産官学連携推進センター運営委員会												◎	○	○	○																				
<b>施設・管理（全学）</b>																																			
図書館運営委員会							◎													○	○	○													
体育施設管理運営委員会								○												○															
R.I.施設運営委員会	○													○								○													
放射線安全管理委員会	○																						○												
放射性同位元素利用施設運営委員会	○													○								○													
動物実験委員会	○																				○	○													
組換えDNA実験安全委員会	○													○																					
<b>研究科委員会</b>																																			
入試委員会			◎												○							○													
教務委員会			◎													○						○													
博士後期課程設置委員会								○			◎						○																		
◎ 委員長	1	2	3	1	3	1	2	1	3									1	1		1														
○ 委員	5	8	1	1	5	2	4	10	5	2	8	4	8	6	6	6	5	6	3			3		1											
<b>学校法人</b>																																			
理事						○																													
評議員						○					○	○																							
<b>研究業績</b>																																			
発表論文	1	8	6			1	1		6	1	1	5		3	1	3	4			1	2	1	1	4											
学会発表	1	6	6	1		13	4		14	2	15	10	10	6	8	13	8	6	8	4	1	7	1	5	3	2	14	8							
著書									2	1																									
特許出願																																			
科研費		1	1				1						1			1	1	1					1		1	1									
受託研究費	1	1	1						3	3	3	1	4	2		1	1	1			1		1	5	1	3									
奨学研究費									3		2	1	2		5		1									1		2							
その他の研究活動								1			2		1									1													

退職

退職

退職

## 平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

●授業時間数は、平成20年度学校法人基礎調査(日本私立学校振興・共済事業団)の算出方法に基づく、平成20年5月1日現在の担当予定時間数である。

●1週間の授業時間数が6時間以上であることが、専任教員の認定(経常費補助金の基礎となる教員数に組み入れることができる)基準の1つとなる。ただし、助教・助手の認定については、授業時間に係る基準は適用されない。

●省略標記の説明

<学年>M1・2:博士前期課程1年・2年、その他は学部の学年

<学期>前:前期、後:後期

<必選の別>必:必修科目(応用生命科学科のみの必修科目及び食品科学科のみの必修科目を含む)、選:選択科目

<関係資格>衛:食品衛生コース科目(食品衛生監視員及び食品衛生管理者任用資格取得)、NR:NR養成講座科目、FS:フードスペシャリスト養成課程科目

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)…(B)	年間 総時間 (B×30)
市川 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	186	6	180
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		30			
	生化学Ⅰ	2	前	必	2	衛	30			
	生化学Ⅱ	2	後	必	2	衛	30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			
	動物バイオテクノロジー	3	後	必	2		30			
	生命科学実習V	3	前	必	1		20			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
梨本 (教授)	動物・細胞生物学特論	M1・2	前	選	1		14	140	5	150
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		20			
	生命科学実習Ⅱ	2	後	必	1		40			
	細胞生物学	3	前	必	2		30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		18			
	遺伝の分子生物学	3	前	必	2		30			
石黒 (教授)	生命科学特別講義	4	前	選	2		1	112	4	120
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	生物有機化学Ⅰ	2	前	必	2	衛	17			
	生物有機化学Ⅱ	2	後	必	2	衛	30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	ゲノム創薬	3	後	選	2		14			
	生体分子認識科学	3	後	選	2		28			
平岡 (教授)	化学工業とグリーンケミストリー	4	前	選	2		6	177	6	180
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
	一次産業と社会・生活	1	前	必	2		13			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		4			
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		30			
	植物バイオテクノロジー	2	後	必	2		30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	生命科学実習Ⅲ	3	前	必	1		40			
及川 (教授)	植物環境学	3	前	選	2		30	167	6	180
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
	植物資源学特論	M1・2	後	選	1		14			
	一次産業と社会・生活	1	前	必	2		17			
	生活安全学	1	後	必	2		30			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	環境科学	2	後	必	2	衛	15			
武内 (教授)	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	20	218	7	210
	資源循環論	2	後	必	2		30			
	生命科学実習Ⅰ	2	後	必	1		40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	有機化学	1	後	必	2	衛	58			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			
	応用生命科学基礎実習Ⅳ	2	前	必	1	衛	80			
波田野 (教授)	有機合成化学	3	前	必	2		30	327	11	330
	生命科学実習Ⅳ	3	前	必	1		40			
	環境調和有機合成化学特論	M1・2	後	選	1		8			
	基礎無機化学	1	前	必	2	衛	58			
	基礎無機化学演習	1	前	必	1		32			
	無機化学	1	後	必	2	衛	58			
	無機化学演習	1	後	必	1		60			
太田 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	229	8	240
	応用生命科学基礎実習Ⅰ	1	後	必	1	衛	80			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		2			
	生物物理化学・海洋生物資源学特論	M1・2	前	選	1		8			
	基礎生物学	1	前	必	2		58			
	基礎生物学演習	1	前	必	1		26			
生物学 (教授)	生物学	1	後	必	2		58	229	8	240
	生物学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	機能形態学	2	前	選	2		30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			

## 平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)…(B)	年間 総時間 (B*30)
小西 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	157	5	150
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		24			
	生体機能学	3	前	選	2		30			
	機能食品科学	3	後	必	2	衛・NR・FS	30			
	食品科学実習Ⅲ	3	前	必	1	衛	40			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		2			
浦上 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	168	6	180
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			
	分子免疫学	3	前	選	2		30			
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	15			
	食品安全学	3	後	必	2	衛・FS	30			
	食品科学実習V	3	前	必	1	衛	40			
	食中毒疫学	3	後	選	2	衛	21			
鶴坂 (教授)	食品科学特別講義	4	前	選	2		2	213	7	210
	生物有機化学I	2	前	必	2	衛	13			
	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80			
	食品化学	2	前	必	2	衛	30			
	食品科学実習I	2	後	必	1	衛・FS	40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		10			
	食品生物工学	3	前	選	2		28			
平山 (教授)	食品科学特別講義	4	前	選	2		4	67	2	60
	食品生物工学・分子科学特論	M1・2	後	選	1		8			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			
	食料・食品資源学	2	後	必	2	衛・FS	13			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			
高久 (准教授)	食品科学特別講義	4	前	選	2	NR	10	116	4	120
	機能性食品開発特論	M1・2	後	選	1		14			
	基礎数学演習	1	前	選	1		14			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	応用生命科学基礎実習II	1	後	必	1		20			
	生命科学実習II	2	後	必	1		40			
米田 (准教授)	科学技術英語VI	3	後	必	1		10	188	6	180
	微生物バイオテクノロジー	3	後	必	2		30			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		1			
	ドライラボⅠ-生命科学とコンピュータ	1	前	必	2		30			
	ドライラボⅡ-IT基礎演習	1	前	必	0.5		56			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	ドライラボⅢ-IT中級演習	2	前	必	0.5		56			
川田 (准教授)	ドライラボⅣ-バイオインフォマティクス	2	後	必	2		17	178	6	180
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	構造生物学とタンパク質工学	3	後	選	2		14			
	基礎無機化学演習	1	前	必	1		28			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	環境科学	2	後	必	2	衛	15			
	分析化学	2	前	必	2	衛	30			
中村 (准教授)	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	20	272	9	270
	生命科学実習I	2	後	必	1		40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	環境保全学	3	前	選	2		28			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
	基礎有機化学	1	前	必	2	衛	58			
	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28			
佐藤 (准教授)	有機化学演習	1	後	必	1		28	120	4	120
	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		28			
	生命科学実習IV	3	前	必	1		40			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
	環境調和有機合成化学特論	M1・2	後	選	1		8			
	基礎有機化学演習	1	前	必	1		2			
三宅 (准教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	196	7	210
	物理化学	2	前	必	2		15			
	応用生命科学基礎実習III	2	前	必	1	衛	30			
	食品分析学	2	後	必	2	衛・FS	30			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		4			
	食品科学実習III	3	前	必	1	衛	40			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			

## 平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)…(B)	年間 総時間 (B*30)
重松 (准教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	131	4	120
	機器分析学	2	後	必	2		15			
	生物工学	2	後	選	2	衛	15			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	13			
	食品製造学	3	前	必	2	衛	7			
	食品科学実習IV	3	前	必	1	衛	40			
	食品物理化学	3	後	選	2		15			
	化学工業とグリーンケミストリー	4	前	選	2		8			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		2			
新井 (准教授)	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28	269	9	270
	機械の動く原理	1	後	選	2		30			
	有機化学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			
	機器分析学	2	後	必	2		15			
	分子構造解析学	2	前	必	2		30			
	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80			
	食品科学実習 I	2	後	必	1	衛・FS	40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		10			
高橋歩 (准教授)	食品生物工学・分子科学特論	M1・2	後	選	1		6	432	14	420
	英語 I	1	前	必	1		58			
	英語 II	1	後	必	1		58			
	コミュニケーション英語 I	1	前	選	1		30			
	コミュニケーション英語 II	1	後	選	1		30			
	科学技術英語 II、IV(再)	1・2	後	必	各1		28			
	英語 III	2	前	必	1		58			
	英語 IV	2	後	必	1		30			
	科学技術英語 III(再)	2	前	必	1		28			
伊藤 (助教)	科学技術英語 V	3	前	必	1		28	92	3	90
	英語リスニング I(英語 I)薬学部開講	1	前	必	1		42			
	英語リスニング II(英語 II)薬学部開講	1	前	必	1		42			
	生物学演習	1	後	必	1		28			
田宮 (助教)	応用生命科学基礎実習 II	1	後	必	1		30	0	0	0
	生命科学実習 V	3	前	必	1		20			
	構造生物学とタンパク質工学	3	後	選	2		14			
相井 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		18	169	6	180
	応用生命科学基礎実習 II	1	後	必	1		30			
	植物生理学	2	前	必	2		30			
	ドライラボIV－バイオインフォマティクス	2	後	必	2		7			
	科学技術英語 VI	3	後	必	1		14			
	生命科学実習 III	3	前	必	1		40			
西田 (助教)	植物育種学	3	後	選	2		30	84	3	90
	基礎数学演習	1	前	選	1		14			
	応用生命科学基礎実習 III	2	前	必	1	衛	30			
	食品科学実習 III	3	前	必	1	衛	40			
永塚 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		24	94	3	90
	応用生命科学基礎実習 III	2	前	必	1	衛	30			
	食品科学実習 II	2	後	必	1	衛	40			
上野 (助教)	応用生命科学基礎実習 I	1	後	必	1	衛	80	138	5	150
	食料・食品資源学	2	後	必	2	衛・FS	4			
	科学技術英語 VI	3	後	必	1		14			
	食品科学実習 IV	3	前	必	1	衛	40			
小長谷 (助教)	応用生命科学基礎実習 I	1	前	必	1		24	75	3	90
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	2			
	食品科学実習 V	3	前	必	1	衛	40			
	食中毒疫学	3	後	選	2	衛	9			
宮崎 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		28	184	6	180
	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28			
	有機化学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学基礎実習 IV	2	前	必	1	衛	80			
	食品科学実習 I	2	後	必	1	衛・FS	40			
小島 (助手)	科学技術英語 VI	3	後	必	1		8	120	4	120
	応用生命科学基礎実習 IV	2	前	必	1	衛	80			
	生命科学実習 IV	3	前	必	1		40			
中野 (助手)								0	0	0

平成20年度 自己点検・評価表

平成 21 年 7 月 31 日

編集 新潟薬科大学応用生命科学部自己点検・評価委員会  
平岡 昇(委員長)、武内 征司、浦上 弘、佐藤 真治